

次代に伝えたい、くらしに根付く文化

①

水とともに生きる文化

ぐじょうはちまん
岐阜県郡上八幡

豊かな自然と四季に恵まれた日本。その中で、それぞれの風土で独自に発展し、有形なもの、無形なものが相俟つて、多様にはぐくまれてきた貴重な文化があります。今回は湧き出る名水とともに生きる人々のくらし、そしてその名水にはぐくまれる染め物についてお伝えします。

水とともに生きる

名水の町として知られる郡上八幡は、鵜飼いでも有名な長良川の上流にあり、奥美濃山地から流れ出る吉田川、小駄良川と3つの清流が合流するなど恵まれた自然に囲まれた土地柄です。ここでは古くから豊富な湧き水をくらしの中に巧みに取り入れてきました。

そのひとつに、「水舟」があります。これは高さの異なる水槽が2層または3層連なったもので、一番高いところは飲用に、次の水槽では野菜や果物を冷やしたり食べ物を洗い、一番下の水槽では使い終わった食器や鍋を洗います。洗い流された食べカスなどは下方の池に流れこみ魚の餌となり、魚や微生物によって浄化された池の水が川に流れこむという、循環



「藍染め」には天然の防虫効果があり、衣類の保存に使われ、また藍染めの古式の製法である正藍染めは、永く使うほど藍染めの良さが出てきます。



もち米糊で輪郭を描き、大豆汁に溶かした顔料で生地を染める「カチン染め」。鯉のぼりは子どもたちの健やかな成長を願っています。



システムになつていのです。

上下水道が普及した現在もなお、この水舟を利用している家が残っており、街角に置かれた水舟が、観光客ののどを潤しています。

また、郡上八幡では町中いたるところに用水が流れています。朝には家の前の水路に堰を立てて水を溜め、その水を花にまき、午後、学校帰りの子どもたちが、楽しそうに水と遊ぶ風景があちこちで見られます。「カワド」と呼ばれる洗い場、主婦たちがなごやかにおしゃべりしている風景も。水がこの町のくらしとコミュニティをつないでいるのです。

豊かな自然と住む人々が協力しあつて守ってきたこの名水は、もうひとつ、伝統産業である「郡上本染」にとってもなくてはならないものです。

鮮やかな藍を 浮かび上がらせる水

郡上本染は400年以上も前から受け継がれている藍染め、カチン染めからなる伝統技法で、岐阜県指定の重要無形文化財です。化学染料が大半を占めるいまなお、「藍染め」では藍玉・木灰・石灰・麩など自然の材料を土間に埋め込まれたかめの中で醸成する古来の方法によつて、

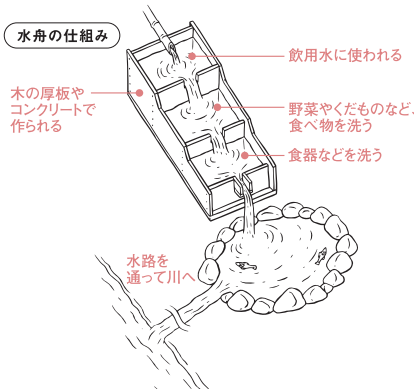


郡上本染のひとつの手法「カチン染め」により染め上げた鯉のぼりは、清流吉田川を流れる冷たい雪解け水で晒されます。その水は生地をひき締め、鮮やかな色彩を際立たせ、色落ちや退色もしにくいのです。

染液がつくられています。その染液に、いく度も布を浸して染めるのが郡上本染。手間を惜しまない伝統の染色方法です。毎年大寒の日には、郡上八幡を流れる3つの川のうちのひとつ吉田川で「カチン染め」で染め上げた「鯉のぼりの寒ざ

らし」を見ることが出来ます。染め上がった鯉のぼりの糊を洗い落としながら冷たい川の水に晒すことで、生地を引き締め、鮮やかな色彩が浮かび上がります。江戸時代から続くこの寒ざらしは、染め物を仕上げるという工程のひとつとどまらず、子どもたちの健やかな成長を願う大切な行事なのです。

鯉のぼりが空に舞う日、山々は新緑におおわれます。その緑に降る雨が豊かでおいしい水となり、自然が循環していく。そんな自然の恵みである水をくらしの中で工夫しながら活かし、染め物をはぐくむ。郡上八幡には水とともに生きる人々の文化があるのです。



野菜を洗ったり、スイカを冷やしたり、いまでも水舟が活躍しています。

資料・写真提供: 渡辺染物店
水舟写真提供: 小俣康男